



- 水稲 いもち病の防除を徹底しましょう ならびに
- サツマイモの葉を食害するナカジロシタバの発生に注意しましょう
と 病害虫防除所より「病害虫速報」が発表されました

1. 水稲 いもち病

病害虫防除所の調査では、7月上旬現在、葉いもちの発病度（本年3.5、平年1.7）および発生地点率（本年51%、平年27%）と、いずれも平年よりやや高い状況であり、一部圃場では補植用の置苗でいもち病が多発し、その周辺株で発病株が認められていること、さらに、向こう1カ月の降水量は平年より多いと予測されて、発生を助長する条件であることから、

「水稲での葉いもちの発生が平年よりやや多い状況です。穂いもちの発生を防ぐため、圃場での発生に注意し、適期に防除を行いましょう」と病害虫速報No.6（7月12日発行）を発表しました。

県内の発生状況では、県央、県西、県南地域で発病度がやや高い状況です。
防除対策として、置苗の早期な除去と適切な処分、発病圃場における薬剤防除の徹底を呼びかけています。

なお、穂いもちの発生条件や防除対策については、**営農ニュースNo.2971号（7月1日発行）**を参照してください。

2. サツマイモの葉を食害するナカジロシタバ

病害虫防除所の調査では、7月上旬現在、サツマイモの葉を食害するナカジロシタバによる被害つる先率が7月下旬の平年値より高く、寄生虫数も7月下旬の平年値よりも多い状況で、例年は8月から9月にかけて被害つる先率および寄生虫数が増加するのが、本年は7月上旬時点で既に7月下旬の平年値を上回っており、今後も高く推移すると予想されることから、

「サツマイモでナカジロシタバの発生が多くなっています！ 早めに圃場を観察し、防除適期を逃さないようにしましょう」と病害虫速報No.5（7月12日発行）で呼びかけています。

<ナカジロシタバの発生生態>

ナカジロシタバは年3回世代を繰り返します。例年は9月上旬頃から発生する第3世代幼虫の発生量が最も多くなります。成虫は夜間に飛び回り、葉の裏に卵を産み付けます。ふ化した若齢幼虫は、つる先の若い葉を好んで食害します。中～老齢幼虫になると、昼間は茎葉の陰などにひそみ、夜間に活動して、葉脈だけを残して暴食するようになります。成熟した幼虫は土中に潜ってマユをつくり、その中で蛹になります。

<防除対策のポイント>

- 1 ナカジロシタバの防除時期は、葉に丸い穴が散見される頃から葉の四分の一くらいが食害されていて目立つ時期（幼虫の若～中齢期）に行います。
- 2 薬剤防除の際は、幼虫が潜んでいることが多い葉裏や株の中にまで、薬液が十分かかるよう丁寧に散布します。

表1 サツマイモの葉を食害するナカジロシタバの主な防除薬剤（令和4年7月14日現在）

薬剤名	希釈倍数	使用時期 / 使用回数	分類
アニキ乳剤	2,000～3,000倍	収穫前日まで / 3回以内	6
アクセルフロアブル ※	1,000～2,000倍	収穫前日まで / 3回以内	22B
ディアナSC	2,500～5,000倍	収穫前日まで / 2回以内	5
フェニックス顆粒水和剤 ※	2,000～6,000倍	収穫前日まで / 2回以内	28
トルネードエースDF	2,000倍	収穫7日前まで / 2回以内	22A
オリオン水和剤40	1,000倍	収穫前日まで / 5回以内	1A
トレボン乳剤	1,000倍	収穫7日前まで / 3回以内	3A
ノーモルト乳剤	1,000倍	収穫7日前まで / 2回以内	15

注1) ※印の薬剤は、無人航空機による農薬登録があります。それぞれの農薬使用基準を遵守して使用してください。
注2) 分類欄には、IRACコードを記載しました。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。
注3) 分類15の剤は、殺虫効果の発現に比較的時間がかかるため、散布時期を早めにしてください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 NEWS は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。